

# 宋時代の漆工品《屈輪合子》の保存修復と復元模造制作に関する研究

## —自然科学調査と『髹飾録』にもとづく—

文化財保存学・保存修復工芸研究室  
馬明新 1319935

東京藝術大学大学美術館所蔵の《屈輪合子》(図1)は中国の北宋時代の制作と考えられ、正円形の印籠造りの合子である。表面は、朱・黄漆を交互に塗り重ね、最上層に透漆を塗り、断面に幅広いV字型で、如意雲文と唐草文を彫り表している。

この「漆を交互に塗り重ねた層に文様を彫る」技法を指すと思われるものが、中国最古の漆芸技法書『髹飾録』<sup>1</sup>(黄成著、楊明註)の中に確認できる。明時代に著わされ、当時までの漆工技術を集大成した本書には、中国古代漆器の命名と分類の根拠が示されている。該当箇所は本文の「彫鏤第十」の「剔犀」(図2)になる。

**剔犀** 有朱面有黒面有透明紫面、或烏間朱綫、或紅間黒帯、或雕黠等復、或三色更疊。其文皆疏刻劍環縹環重圈回文雲鈎之類、純朱者不好。  
揚注 此制源於錐毗而極巧致精、複色多且厚用欵刻、故名。三色更疊、言朱黃黒錯重也。用綠者非古製、剔法有仰瓦、有峻深。<sup>2</sup>

ここから、剔犀は、複色の漆を塗り重ねたものが多く、文様は如意雲文、唐草文、屈輪文などの曲線文様になり、彫りの断面は逆にした瓦のような浅い彫りと険しく深い彫りがあることがわかる。《屈輪合子》の特徴は朱・黄・黒の「三色更疊」、「仰瓦」のような彫方と一致するので、剔犀技法の典型的な作品であるといえよう。また、「緑を用いるものは昔の制作ではない」とされているため、本作品が早期の剔犀作品である可能性も指摘できる。



図1 《屈輪合子》

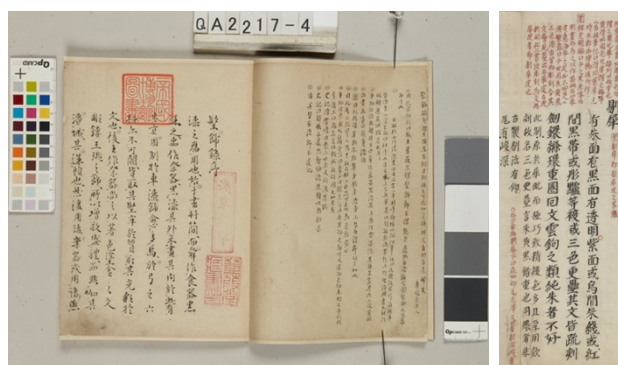


図2 兼葭堂本『髹飾録』及び「剔犀」記録

剔犀技法は、中国伝統漆芸技法—彫漆の一の種類である。遅くとも唐時代に始まった彫漆は、宋時代から本格的に行われるようになり、後の元、明、清時代の彫漆の規範と基礎となった。宋時代の彫漆種類は、今知られる限り、剔犀、剔紅と剔黒がある。剔犀の中に、《屈輪合子》を含むより早い時期に属する作品に、東京国立博物館所蔵の《犀皮盆》二枚、浙江省博物館所蔵の《宋剔犀黒扣銀辺漆盒》などの例が挙げられる。

《屈輪合子》は現代に伝える貴重な作例であるが、経年劣化で塗り重ね部分の塗膜に亀裂や断面が生じ、剥落の危険性がある不安定な状態のため、適切な修復案の検討が必要になってきた。また、剔犀に関する研究は20世紀から始まったが、他の漆芸技法に比べるとまだ極めて少数

<sup>1</sup> 原本が散逸し、抄本二冊(兼葭堂本『髹飾録』と徳川本『髹飾録』)がある。

<sup>2</sup> 兼葭堂本『髹飾録』による。

である。研究内容が工芸史的な考察が多いことに対し、実技についての研究はまだ行われていない。

以上の問題に着目し、《屈輪合子》について、自然科学調査と『髹飾録』などの史料文献調査をもとに研究を行う。さらに、その成果を保存修復方法の検討と復元模造制作へ繋げてゆくことで、彫漆作品の修復方法の提案と早期の剔犀技法の解明及び伝承することを目的とする。

研究方法は、類似作例の比較、史料文献、先行研究の考察などを通じて進め、得られた知見で本作品にもちいられた技法を解明する。保存修復は、科学実験を踏まえて適切な修復案を検討提案する。復元模造は、自然科学調査と試作もとに行う。

### 1、《屈輪合子》と彫漆

類似作例、史料と先行研究から《屈輪合子》の文様、技法、用途などを考察する。次に、歴史、文化、経済といった背景から、漆工品の制作制度、審美的価値観の変化、「異工互効」現象など多角的に研究し、宋時代の漆器生産の様子と剔犀技法の発展を考察する。そして、『髹飾録』の「彫鏤第十」を参照し、剔犀とそれぞれの彫漆技法手板を作成して比較し、彫漆を技法的な視点で研究する。

### 2、保存修復

デジタル顕微鏡、X線透過撮影、蛍光 X 線分析などの非破壊分析を行い、元の場所の判明できない剥落片を用いて塗膜断面分析を実施する。漆は紫外線照射により劣化が生じる特徴を利用し、科学調査で判明した原材料と制作工程に従って実験用手板試料を作成し、劣化促進実験を行う。日本での伝統的修復材料－漆と膠、欧米系の修復材料－パラロイドとシェラックを用いて手板試料に施し、再び劣化促進実験を行う。顕微鏡に手板試料を確認して各種類の修復材料を評価し、作品に適切な修復材料を提案する。

### 3、復元模造

科学調査の結果、文献史料と現代の剔犀技法を照らし合わせ、材料道具、制作工程などを研究して原技法を解明し、復元模造を行う。また、本作品の参考資料として復元作品と同時に四つの工程見本を作成する。

本研究では、塗り重ねた塗膜に施す修復行為の今後を見据える実験を通じて、彫漆作品の保存に貢献し、復元模造制作を通じて、剔犀技法の実技的な面を解明し、技法の伝承を可能にする。